歪んだ愛

峰春秋人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歪んだ愛

【Nコード】

N4480P

【作者名】

峰春秋人

【あらすじ】

歪んだ、歪んだ愛の物語。

ただ一人の特別（前書き）

フィクションです

ただ一人の特別

ただ一人の彼の特別になりたい。

「人ラブ！」

人間をすべて平等に愛してしまう彼の特別になるには？
この命が尽きてしまう前に彼の特別になりたい。
私はもうすぐ死んでしまうから……。早く早く……。

「イザヤ。おはよう。」

携帯に打ち込んだものは毎日彼に送る言葉。
朝起きてイザヤにメールをする。
これが私の日課。
イザヤは打つのが早いからすぐ返ってくる。

「おはよう 今日5時くらいに行くね。」

イザヤは一日に一回絶対に私に会いに来てくれる。
その時間が楽しみでなんども時計を見ては期待に胸を膨らませていた。

本当はイザヤと池袋の町を散歩したいのだけど……。
いつ発作が起きてもおかしくないから動いちゃ駄目なの。
一日だけ外出許可が出ないかな。
そう……。たった一日いや……。一時間でもいい。外に出たい。

あの青ぞおらの下でイザヤと一緒に散歩したい。

「ねえ、イザヤ。」

「なに？」

「私のこと好き？」

「好き。」

「・・・波江さんは？」

「好き！」

「・・・人間は？」

「人ラブ！」

「・・・平等に好きなの？」

「うん。」

「特別に好きなひとは？」

「いないよ。そんな人はね。」

「そっか。」

私はイザヤが本気で好きだよ。」

送信のボタンを押そうとした。

けど、押さなかった。

携帯を閉じて机に置いた。

（イザヤの馬鹿。）

ゆっくりと目を伏せた。

そのまま深い眠りに落ちていった。

目が覚めた。

月明かりが窓から差し込んできて程よく部屋を照らしてくれていた。

まだ現実と夢の区別がつかないまま隣に視線を移した。

白いカーテンがあるだけ。

視線を白い天井へと戻して目をまた伏せた。

その時、

「電話だよ！電話だよ！」
隣から女の子の声が聞こえてくる。
もう一度目を開いて視線を動かした。
携帯電話が喋っていた。・・・いや着信音だ。
体を起こさないうで手だけを布団から出して携帯を開けた。
「イザヤ」
と書かれた字が点滅している。
うつろな目を瞬かせて通話ボタンを押した。
携帯を耳に当てて小さな声で返事をする。

「・・・もしもし？」
「斎いらい。やっと出てくれたね。」
「え・・・。あ。ごめん。」
「今日はいけなくてごめんね。」
「来なかったの？」
「え？知らなかったの？」
「だって・・・寝てたもの。」
「なーんだ。」
「ねえ、イザヤ。」
「ん？」
「どうして来なかったの？」
「気になる？」
「うん。」
「・・・デート。」
「・・・嘘。」
「ばれた？」
「・・・どこ行ってたの？」
「えーとね、ちょっとシズちゃんと喧嘩してた。」
「怪我したの!？」
「いやー。ちよっとほっぺたを切っただけ。」

その言葉を聞いて私は胸を締め付けられる思いだった。
イザヤのあの白いほっぺたに紅い一文字の傷があるんだ。

「どうしたの？」

「なんでもないよ。」

「そうだ。斎。」

「何？」

「朝メールで言った”特別なひと”のことなんだけどさ。」

「あ・・・うん。」

「いたよ。」

「え？」

聞きたくなかった。

でも・・・聞きたい。

私かもしれないっていう勝手な思いこみがあったから。

「その人はね・・・。」

「・・・。」

「僕といっつも一緒にいる人なんだ。」

・・・波江さんだ。

その言葉を聞いて私の胸が張り裂けそうになった。
痛くて苦しくて・・・どうしていいかわからない。

「・・・斎？」

「ごめん。見回り来たからキルね。」

そういつてイザヤの返事も聞かずに私は携帯電話を閉じた。
ちゃんと携帯電話を切ったかわからなかった。

でも、それも確認しないで目を伏せた。
また深い眠りにつきたくて。

いつそのこと・・・このまま目覚めなければいいのに。
その時、

「ケホ・・・ゲホッ！ゴホッ！」

咳が出てそのまま息ができないまま続いた。

苦しかった。

咳が次から次へと襲いかかってきて息をする暇さえ与えてくれない。

（私・・・このまま死んじゃうのかな？）

そんなことが頭をよぎった。

ナースボタンに手を伸ばした。けど、どんだん力が抜けて届きそう
で届かない。

（イザヤ・・・最後にあなたの声が聞きたかった。）
涙がほほを駆け抜けた。

「・・・つき。い。。齋！」

割れた声が響く。

まだ私は咳をしていた。

うつろな瞳をしきりに動かして声のもとを探した。

声のもとを光を定期的にはなっていた。

携帯電話。

さつき切りきれていなかったのだろう・・・。

私は手元のそれをつかんで耳へとあてた。

「イ・・・イザヤ。ゲホッ！」

「齋！大丈夫か！？今そつちに行くから！」

こんな焦ったイザヤの声聞いたことがない。

なんでそんなに焦るの？私が死んでも別に・・・。

「イザヤには・・・ゴホッ！波江さんがいるでしょ？」
「何言ってるんだよ？」
「だってさっき・・・ゴホッ！！ゲホ！」
「違う！ずっとそばにいるのは・・・斎だよ。」
「・・・。」

咳が止まった。

それだけの言葉で発作が・・・。

「イザヤ？」
「・・・一番特別な人。斎だよ。」
「なんで？いつもそばに」
「いるよ。僕の心の中に。」

涙があふれることはなくただ嬉しくて今すぐにイザヤに会って抱き
つきたかった。

イザヤの胸の中で涙が枯れるまで泣きたい。

「イザヤ・・・。」
「何？」
「・・・おやすみ。」
「！」
「お・や・す・み。」
「・・・はは。おやすみww」

笑った声でイザヤは言つと電話を・・・。

「・・・早く切つてよイザヤww」
「そっちこそww」
「じゃ・・・せーのできろっね。」

「うん。」
『せーの』
「……………」
「……………」
「はやくww」
「そっちこそ。」

そのあと二人して切らなかつた。

けど、見回りに来た看護師さんに見つかって結局きつた。

次の日。いつものようにメールを送って青い空を見てたら珍しく看護師さんが来た。

「斎ちゃん。おはよう。」
「おはよう。」
「斎ちゃん。」
「ん？」

私が看護師さんのほうに視線を向けると看護師さんはここにきていた。

いつもはどんよりとしたくらい顔なのに。

「どうしたの？」
「よかったわね。」
「何が？」
「うふふふ。」

はつきりしない看護師さんを見て私はむっとした顔をする。
すると、看護師さんはまたにこにことして口を開いた。

「……………」
その言葉は絶対に聞けないと思っていた。

私は満面の笑みを浮かべた。
青い空に太陽がのぼった。眩しすぎるくらいの太陽が。

一ヶ月後。

病院の外へ一歩を踏み出した。

青い空を見上げて大きく息を吸う。

「斎。」

名前を呼ばれて目の前を見ると。

「イザヤ。」

笑って笑って大好きな特別なあの人に抱きついた。
初めて胸がいつぱいになって人生で一番笑えた気がする。

ただ一人の特別（後書き）

続く

愛しました(前書き)

フィクションです

愛しました

昔のことだった。

意地悪でうざい憎まれ屋情報屋さんと純粹で病弱な少女がいました。二人は付き合っていました。ここは重要ね。過去形。わかる？

少女は前まで病院で寝たきりだった子。情報屋さんとはメールでやり取りをしていた。

で、ある日奇跡的に看護師さんの口から

「退院おめでとう。」

という言葉が出た。それは本当のことでもみんなが喜んだ。

一番喜んだ情報屋さんに抱きついて少女は泣いたとき。

まあ、そこまではめでたしなんだけど終了しちゃ駄目。

そのあと少女と情報屋は二人の世界を二人だけの時間を満喫した。

なのに・・・少女はそれを壊した。

情報屋は少女に尽くしてそして愛した。

けど、少女は自分の新しい世界に現れた男に恋した。

そいつはニット帽をかぶった男で情報屋さんの同級生だった。

情報屋さんは悲しんだ。ひどくひどくね。

やっと檻から出てきた鳥が自分の手元から離れて行ってしまった。

これはそんな情報屋さんの過去話。

悲しい悲しい情報屋さんの元・彼女さんがまだ病院にいたときの話。

朝6時。ベッドから体を起して臨也は目をこする。それと同時に携帯電話が震えながら点滅する。数秒の震えの後止まって明りだけが点滅を続ける。

臨也は携帯電話を手にとって上にスライドさせてメールボックスを開ける。

「斎」と書かれたメールボックスが出てくる。

そこを開けてみると一件だけ未解読のメールがあった。それを開けてみると、

「イザヤ。おはよう。」

と淡々と打ち込まれた文字が並んでいた。

それを見て臨也は口元を釣りあげた。

早く打ち込んで携帯をベッドに放り投げる。そして、もう一度眠りにつく。

目を閉じて布団をかぶる。

頭には携帯の送信者「斎」が浮かぶ。

「イザヤ」「いーざや」

と自分の名前を呼んではしゃいでいる斎の姿が。

でもそれがあり得ないと知っているから臨也はまた眠りについてしまふ。

お昼くらいになってもう一度携帯が震えた。

ゆっくりと目を開けると携帯電話が何故か臨也のおでこに置かれていた。

謎に思つて頭にクエスチョンを浮かべながら臨也は携帯電話をスライドさせる。

二件ほど入っていたメールを開けると片方は斎から。もう片方は新羅からだつた。

先に斎のほうを開けてそのあとに新羅のほうを開ける臨也。

「今日のお昼に僕の家に来て。ちょっと話したいことがあるんだ。」
「それだけ書いてあった。」
「ちらりと横にあった時計に目を移すと短い針が11を指していた。長い針は6のところだった。」
「ちょっと急ぎ気味に臨也は携帯をいじりながら支度を始めた。」
「斎とのメールのやり取り。」

「ねえ、イザヤ。」
「なに？」
「私のこと好き？」
「好き。」
「・・・波江さんは？」
「好き！」
「・・・人間は？」
「人ラブ！」
「・・・平等に好きなの？」
「うん。」
「特別に好きなひとは？」
「いるよ。斎だよ。」

送信ボタンを押そうとして臨也の指が止まる。
「何かに恐れた自分がそこにいた。」
「斎は俺なんか好きではないとか斎には迷惑なのかな？とかちよつとした断られた時の恐れ。」
「ちよつとした可能性を信じた臨也はその文字を消した。」

「いないよ。そんな人はね。」

そんな自分らしいそっけない態度なら怪しまれないし齋も大丈夫だろう。

齋からメールが返ってくることはなかったけど。

携帯をポケットに押し込んでちょうど12時に臨也は家を出た。

歩いてちよつと遠い新羅の家に行こうとした。

が、その行く手間が省けた。

「やあ、セルティ。」

黒いライダースーツに身を包んだ女・セルティが相棒バイクの前に立っていた。

携帯を触ってセルティはそれを見せつける。

「遅いから迎えに来た。」

そう書いてあった。

臨也はそれを数秒で読むとうなずいて「ごめん」と詫びを入れた。

セルティにヘルメットを渡されてそれをかぶる。

後ろにまたがってバイクがスピードを上げて新羅のところまで走っていく。

風を受けながら臨也は思った。

(いつかこの風をこの空気をあいつにも見せて感じさせたい。)

頭の中で齋がほほ笑む。それだけで一緒にいる気がして楽しかった。

素早く右に流れて行く景色を見ながら臨也は齋との未来予想図を築いていた。

「もー。遅れるなら言えばいいじゃん。」

「悪いねえー。」

なんてのんきな臨也はどこかを見ていて幸せそうにしていた。

新羅はコーヒーを臨也の前に出しながら「？」の文字を頭に浮かべていた。

「どうしたの？なんか幸せそうだね。」

にっこり笑って言うと臨也は天井を仰ぎながらにこっと笑った。そしてコーヒーを手を取った。

「特別な人がきたんだ。」

「えーと・・・矢霧製薬の波江さん？」

「違うよ。あの人は別。もっと愛してる！と言える人。」

「・・・？」

「齋だよ。知ってるだろ？」

「ん？誰それ？」

などといった会話をしているうちにどんどん大事なことをいい忘れてるなーと気づいたのはセルティだけだった。なんかもう途中からセルティと齋の自慢になってる気がーなんて思ったのもセルティだけ。

「おい！新羅。言わなくていいのか？」

「ああ！そつだそつだ。」

とやっと思い出した新羅はポケットから一枚の手紙を出した。

「これを見てくれ。」

「ん？」

そこには赤い染と文字が書かれていた。

紙はボロボロで途中が破れてる。でも、文字が切れていたりはない。

この手紙を書くのにノートかなんかから切り離したような感じ。

「母へ 私は平和島静雄を愛することはできません。」

それだけが書かれていた。

臨也はそれを見た後にまじまじと新羅を見つめた。

「で、僕に何をしろって？シズちゃんの護衛？」

「違うよ。それを書いた人を探してるんだ。手紙は露西亞寿司の近くの路地裏に落ちてたんだ。それを見つけたのはセルティだったんだけど……。ともかく、これを書いた人は自分の意識があるときにでも自分が罪歌の子供であることを理解していて母が誰かも知っているんだ。」

「その子を捕まえるの？」

「当たり前だよ。なんせ。」

「シズちゃんが狙われてるから？」

「そうだよ！」

「・・・断るよ。」

そういつて臨也はソファーから体を浮かした。

すたすたと玄関に足取りを進める。

「なんで!？」

「僕は別にシズちゃんがそれくらいで死ぬとは思わないし、シズちゃんも死んでも困らないから。」

そういつて臨也は出て行った。

新羅はソファーにもう一度腰をおろし直して残っていたコーヒーを飲みほした。

セルティが近くによって携帯電話を見せる。

「大丈夫だ。静雄は私が守る。」
「ありがとう……。セルティ。」

そういつて悲しそうな目で新羅は何もなくなったコーヒーカップの底を見た。

変な形をした跡が残っている。でも、徐々に下にたまって行った。

「はあー。」

最後に新羅は大きなため息をついた。

新羅の家を出てから臨也は池袋の町に繰り出した。

西公園を歩いて露西亜寿司まで行ったりだんだと自由に。

(まだ4時か……。あと1時間時間をつぶさなきゃ。)

携帯をスライドさせて臨也は時間を見る。

その時、

「いーざーやー!!」

と叫び声……。というか怒声が臨也の真後ろから聞こえる。

自分を睨みつける金髪の男・平和島静雄がこちらに走ってきていた。

臨也はため息をついて冷たい視線で静雄を見てからアスファルトを強く蹴って走り出した。

(ちょっとした暇つぶしになるかな。)

そう思うと自然に口元がっぴりあがった。

「シズちゃん。」

「いーざーやー!!」

静雄が物を投げて臨也がそれをよけて行く。

自販機、ポスト、ゴミ箱、あるいは人か。

次から次へと投げられるものをかるーくかわす臨也。

いつか臨也のシューティングゲームとかでないのかな・・・って誰も思わないけど思いそうなくらいさつきからうまくよけている。

(あ・・・。あと10分で5時だ。)

逃げながら近くにあった時計で時間を確認した。

このまま来良病院に行こうと思ったけど静雄がいるのに危険すぎる。

臨也は急に方向回転して静雄に飛びかかった。

ちょうどそのとき静雄の手には道路標識が握られていた。

だから、それを精一杯大きく回して静雄は臨也を振り払おうとした。

「ガン！」

と鈍い音がして臨也が吹き飛ばされた。

静雄がにこつと笑って臨也を見た。が、臨也は逃げた。

それが作戦だったとはつゆ知らず静雄は慌てて追いかけた。

逃げ足が早い臨也はすぎにいなくなってしまった。

裏路地を通って病院に行こうとしたがあまりにも時間がオーバーしていた。

ココから走っても30分はかかってしまう。

(ずいぶん遠くまで来ちゃった・・・。)

そう考えながら携帯の時計を見た。

5時15分。面会時間終了まであと15分。

臨也は盛大なため息をついて歩くのをやめた。

裏路地の壁にもたれかかりながら服のほこりをはらって、髪の毛を整えた。

「痛ッ。」

ほっぺたに激痛が走った。

思わず声を上げたがそれほど痛くもなかったことに気付いた。

携帯の裏を鏡代わりにして顔を見る。

ほっぺたのところに一文字の傷が入って血が流れていた。

じーっとそれを見ると臨也は何事もなかったように携帯を表にしてスライドさせた。

斎に謝りのメールを送っていた。

携帯をじーっと見つめて斎の悲しむ顔を思い出して臨也も悲しそうな顔になる。

しばらくしても・・・返信は来なかった。

寝てるとも思っただけど心配になって病院に足を向けた。

携帯をいじりながら裏道をゆっくりと歩いて行った。

(・・・怒ってるのかな?)

そう思っって着信履歴を開く。

「斎」と書かれたのを押して電話をする。

「通話中」という文字が出される。

「・・・もしもし。斎。やっとでてくれたね。」

「え・・・。あ。ごめん。」

その声は今起きたばかりという声だった。

臨也は小さく安堵のため息をついた。

「今日はいけなくてごめんね。」

「来なかったの？」

「え？知らなかったの？」

「だって・・・寝てたもの。」

「なーんだ。」

「ねえ、イザヤ。」

「ん？」

「どうして来なかったの？」

「気になる？」

「うん。」

「・・・デート。」

「・・・嘘。」

「ばれた？」

「・・・どこ行ってたの？」

「えーとね、ちよつとシズちゃんと喧嘩してた。」

「怪我したの!？」

「いやー。ちよつとほつぺたを切っただけ。」

と今までのことを話したりと面会で話そうと思ってたこともあったけどさ。

齋は心配そうにそれでもちよつとや気持ちを焼いていた感じだった。

臨也はというと齋と喋れただけでもう幸せそうだった。

「そうだ。齋。」

「何？」

「朝メールで言った”特別なひと”のことなんだけども。」

「あ・・・うん。」

「いたよ。」

「え？」

齋を喜ばせようといじわるげに臨也は話し始めた。
相手のことも忘れて。

「その人はね・・・。」

「……。」

「僕といっつも一緒にいる人なんだ。」

臨也はただ素直に言ったただけだった。

けど、斎の言葉が止まった。

臨也はすこし不思議に思った。

「……斎？」

「ごめん。見回り来たからキルね。」

そう斎の言葉の後に電話が切れる音はなかった。

臨也は心配になってそのまま電話を切らないでいた。

あつちが切つてないなら大丈夫と思ったから。

しばらくはザーツと言う音しか聞こえなかった。

臨也は待ったけど斎は全く返答してこない。

待ちきれないで携帯を切ろうとした。

その時、

「ケホ……ゲホツ！ゴホツ！」

声が聞こえた。

けど……斎の苦しそうな声だった。

携帯にしがみつくような感じに大声で叫んだ。

「……つき。い……。斎！」

反応があってもなくても叫んだ。

裏道で臨也の声が響いた。

「イ……イザヤ。ゲホツ！」

齋が反応した。

足が走るのをやめそうになってそれでも走り続けた。

「齋！大丈夫か！？今そつちに行くから！」

必死になって大声で叫んで伝えた。
すると、

「イザヤには・・・ゴホツ！波江さんがいるでしょ？」

齋がそんなことを言った。

臨也は思わず走るのをやめてしまった。

「何言ってるんだよ？」

「だってさつき・・・ゴホツ！！ゲホ！」

その言葉で理解した。

齋の発作の原因。

臨也は強い口調で叫んだ。

「違う！ずっとそばにいるのは・・・齋だよ。」

「・・・。」

（ほら。やっぱりそうだ・・・。）

臨也は安心したのかまた路地の壁に寄り掛かった。

「イザヤ？」

おかしな声をあげて齋が臨也の名前を呼ぶ。

「・・・一番特別な人。斎だよ。」
「なんで？いつもそばに」
「いるよ。僕の心の中に。」

空を見上げた。

真っ暗な空にいくつもの星が点々と輝いていた。

「イザヤ・・・。」

突然斎の声が携帯から聞こえた。

「何？」

「・・・おやすみ。」

「！」

いきなりの言葉に寄りかかっていた壁から離れて身を乗り出す。

「お・や・す・み。」

「・・・はは。おやすみww」

そういつて携帯を切るうとしたけど遠慮がちにあっちがきるのを待った。

が、切られる音がしなかった。

「・・・早く切ってよイザヤww」

「そっちこそww」

「じゃ・・・せーのできるっね。」

「うん。」

『せーの』

「……。」

「……。」

「はやくww」

「そっちこそ。」

二人で譲り合っていた。

携帯電話をどちらがきるかなんてどうでもいいことだ。

けど、長く長く斎と臨也と喋りたい。今日だけは……。しばらくして斎のほうが見回りの看護師に見つかって切ってしまったけど。

次の日の朝も携帯でおはようのメールが来た。

臨也も返信した。

お昼になって携帯が震えた。

「病院」と書かれた文字が点滅していた。

急いで臨也が携帯電話に出ると、

「イザヤ！」

大声で叫ぶ斎の声があった

てっきり臨也は何か病気で倒れたと思っていた。

「どうしたの？」

「あのね。」

「ん？」

嬉しそうに斎が言葉を紡ぐ。

そして、

「また……イザヤに抱きつけるよ。」

その言葉の意味は臨也にはすぐに分かった。

臨也は喜びの言葉を齋に言った。

齋はすごく喜んでいた。

それから・・・2ヶ月後。

「イザヤ。・・・さよなら。」

そう言われて電話は切られた。

ブーブーといつまでも臨也の耳にそれは響いた。

初めて胸が張り裂けそうなくらいに苦しくなった。

目から大粒の涙がポロポロと零れ落ちて止められなかった。

「イザヤ。大丈夫？」

新羅にまた呼び出された臨也は意気消沈していた。

魂が抜けたように毎日毎日うつむいて暗かった。

「話だけ聞いててくれよ。こないだセルティが新宿の歌舞伎町に仕事に行った時のことなんだけどね、最近の歌舞伎町の治安が悪いのは知ってるね？裏で人身売買があるって話も聞いてた。それは本当だったんだ。セルティがその人身売買会場の近くで依頼人と待ち合わせしてたんだって。そしたら、依頼人が持ってきたものが人・・・っていうか改造人間だったんだ。人身売買で買われた人らしいんだけど心の操作がきかないんだって。だから、始末してくれって任務だったんだ。その子の顔を見てセルティが思い出したんだよ。君の・・・元・彼女を。」

その言葉を聞いて意気消沈していた臨也が顔を上げた。

新羅の横に立っていたセルティが自分の部屋に戻って行った。

しばらくして戻ってくると後ろにはびったりとくっついた少女が一

人いた。

その目にも顔つきにも見覚えは十分あった。髪の色は銀色でいつか見た星のようだった。星って実は黄色じゃなかったりする。

長くてサラサラしてそうで……。

「……齋。」

ここまでがその可哀そうな情報屋さんのお話。

情報屋さんはそれからその少女を預かった。

少女を齋と重ね合わせはしなかった。最初はそうだったかもしれないけど今は違う。

自分を裏切らない唯一の彼女として大事に大事にしている。

「イザヤ。」

彼女が名前を呼べば臨也も反応してすぐに返事を返す。たまには抱きしめたりもする。

「星愛。」

僕はもう絶対に離したりはしない。

彼女を。

愛しました（後書き）

星を愛すってことで星愛

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4480p/>

歪んだ愛

2011年4月12日18時34分発行